第八章　哀しみのとき

年末、晋さんの自宅では仲間を集めて恒例のカラオケ大会があった。高橋圭三さんの司会、宮川泰さんのピアノ、平尾昌晃さんのギターで大賞を競う。今里廣記さん、塚本幸一さん、松園尚巳さん、五島哲さんらが常連で、私も三〇年前のアメリカのポピュラー『嘘は罪』を歌い、同時代の青春を送った渡邊晋委員長の機微にふれ大賞をもらったことがある。東京でお正月を過ごす友人を集めて、映画監督の山田洋次さんと、『男はつらいよ』を観る年始めの会もあった。

ホスト役の晋さんはいつもニコニコと頷きながら、細やかな気配りをする。この人がいるだけでいろいろな人が集まり、温かい団らんが生まれた。誰かがうまくゆくとお祝いの集いを考え、誰かが悲しい時には数人で静かに話を聴く。口べたでテレ性の晋さんの心意気はなかなか通じなかったようだが、いつも生き方に筋を通してジッと頑張り通してきた。見栄を張ったり突っ張ったりする人をやさしく眺めて、困った人だと哄笑する晋さんを私は好きだった。

亡くなる直前、相田みつを氏の本に添えて書き贈った手紙が最後になった。その本に「おてんとうさまのひかりをいっぱい吸ったあったかい座ぶとんのような人」という一文がある。ありがとう、晋さん。

牛尾治朗（ウシオ電機会長、経済同友会代表幹事／日本経済新聞八七年二月二四日付「交遊抄」）

宿病の進行

晋が、左上顎の歯茎に小さな腫瘍を発見したのは一九七二～三（昭和四七～八）年であった。唾に血の色がまじるようになって、はじめて五反田の関東逓信病院歯科で診察を受けた。主治医は「良性だけれど、腫瘍はやはり取ったほうがいいでしょう」と言った。東大病院で手術を受け、剔出した個所は放射線科のコバルト照射に委ねられた。それが悪性腫瘍であったことはひそかに美佐へ伝えられた。美佐は五島昇と岩堀喜之助にだけ事情を打ちあけた。

コバルト照射は左眼の白内障を誘発した。眼科は京大がいいときいて、晋は京大病院で白内障の手術を受けることにした。視力が落ちてはゴルフもできないと、なかば自分を励ますような冗談を残して、東京を発った。国立・京大病院には個室がなく、関西医科大学病院に入って、そこで京大の医師が執刀した。

眼の手術は成功した。失明同然の左眼が〇・三まで視力を回復したのだ。医師はコンタクトの着用を勧めたが、初期のそれはなかなか材質が馴染まず、結局、晋はコンタクトをつけたことがなかった。「こうなったら、独眼竜ゴルフを完成するしかない」と、逆に意気込んでいたという。術後は京大へ通院した。京都ホテルに三週間滞在し、塚本幸一らとよく麻雀を楽しんだ。

晋が、「ひょっとして癌ではあるまいか」と疑いはじめたのは、京大の眼科からであるらしい。事実、京大は内緒で抗癌剤を投与したが、晋は医師が詳しい説明をしない限り、薬を飲まなかった。「これで充分さ」といって常用していたのは熊の胆だった。

死後、机の引き出しの底から、高嶋易断総本部の便箋に「渡邊晋殿」と認めた手書きの「転回運命」が発見された。便箋は三枚あって、最後に「昭和五九（一九八四）年から同

六二（八七）年九月迄　凶運期」とある。一度か二度しか読まれた形跡がないまま、便箋は赤茶けた色に褪せている。度重なるコバルト照射は、晋の左頬を徐々に陥没させ、それにつれてサングラスの色が濃くなった。

晋がいちばん悩まされたのは、執拗に襲ってくる頭痛であった。それをまぎらわすために、執務中にもブランデーをちびちびとなめていたが、やがてメキシコ産のシェリー酒「ティオ・ペペ」を愛用するようになった。これはアルコール成分のまわりが早い。病状の進行と酒量の追いかけっこがはじまり、その頃から、晋と紺野の間に、「もう一杯だけ」「だめです」と、声をひそめたやりとりが繰り返されるようになった。

「社長、今日は検診ですよ」「わかってる。でも、あれは体力をとられるんだ。仕事に差しつかえるなあ」「仕事より身体です」「おれの身になってみろ」。夜遅く晋を送って社長邸につくと、深夜映画をみながら軽い夜食を摂る。宿屋の和朝食のような献立。これは福岡黒田藩の有名な藩医で、かつ儒者だった貝原益軒の「養生訓」が、黒田藩士・渡邊家の家風になったという側面もあるだろう。よく吟味された米と、二種以上の味噌を合わせた味噌汁は、食通をもって鳴る山口比呂志を唸らせたほどのもので、渡邊家の味と言ってよかった。その間、紺野は酒を飲んでいる。こんどは紺野が「いい加減にしろ」と言われ、「もう一杯」と頼み込む。そんなときの、晋の表情はじつにやさしい。

八〇年の秋、東宝芸能の鈴木勲は日比谷を歩いていて、思いがけず晋に出逢った。日劇ショーのプロデューサーとして、以前はよく晋と打ち合せをしていたが、ショーの閉鎖とともに会うことも少なくなっていた。来年は日劇の建物を取り壊す予定になっていた。

鈴木に笑顔を向けた晋は、急に表情を硬くして「日劇はこのまま閉まるの？」ときいた。「ええ」と答える鈴木に、「ちょっと会社までおいでよ」と誘った。渡辺プロの社長室に戻

日劇サヨナラ・フェスティバル（正面）

るなり、「それはないよ。日劇を愛してきた者にとって、このまま終わらせることは忍びない。せめてサヨナラ公演ぐらい、なんとかしようよ」と熱っぽい口調になった。

晋は全面協力を約束した。それを頼りに、鈴木は東宝の松岡功社長に、日劇サヨナラ公演の実施を訴えた。「やる気があるなら、やってみろ」と、即座に松岡はOKを出した。僅か半年の間に、日劇の舞台は荒れ果てていた。照明器具や吊り物も撤去されていた。呆然と立ち尽くす鈴木を晋は励まし、相談に乗った。

日劇サヨナラ公演は、八一年一月二二日から二五日まで「ウェスタン・カーニバル」をぶつけて世間を湧かせた。公演の見通しが立ったとき、晋は鈴木に「ジュリーとショーケンが中心だな。田邊昭知と内田裕也に細かいことは委せるといい。構成・演出には山本紫朗さんを引っ張りだすんだね」と言って、自分は一歩退いた。

タイガースが急遽再編され、スパイダース、ブルーコメッツ、ワイルドワンズなどとともにGSが中心となり、日替りで山下敬二郎、小坂一也、寺本圭一、ジェリー藤尾ら、なつかしいメンバーが出演した。千秋楽のステージに美佐が呼び上げられ、ロカビリアンたちからの花束に埋もれた。美佐は客席にいる晋の姿を探し求めた。そのあと「サヨナラ日劇フェスティバル」が、第一部レビュー、第二部歌謡ショーの構成ではじまり、二月二五日に最後の幕をおろした。

日劇の緞帳は細かく裁断されて、関係者に記念として贈呈された。晋と美佐ももらった。ふたりにとって、それは宝物にもひとしい綴れ織りだった。同じ細片を手にとりながら、鈴木はいまでも思う。「あのとき晋さんに会い、晋さんに言われなかったら、日劇のサヨナラ公演はなかったのだ」と。

課題に対する飽くことなき挑戦と粘りは、晋の生涯を貫いた基調低音だったが、人や事のラストを鮮やかに惜しむ美学も、晋の大きな特性だったといえるのではないか。

日劇サヨナラ公演のステージ

「ラスト・タイクーン」

晋がひとりの男として、もっとも熱中した仕事は映画製作だった。遺作となったイタリアとの合作映画『シャタラー』を含めて、生涯に五六本をプロデュースした。うちクレージー・キャッツのシリーズが三〇本ある。日本映画の本格的な海外ロケは、このシリーズからはじまったと言っていい。頂点に立つのは、東宝創立三五周年を記念して製作された上映時間二時間三八分の大作『クレージー黄金作戦』だろう。ラスベガスのメインストリートで繰り広げたロケは、いまも語り草になっている。

前出の田波靖男『日本映画のラスト・タイクーン』によると、晋はクレージー・キャッツ結成一〇周年記念の『大冒険』から、製作費の一部を自ら出資し、東宝・渡辺プロ提携作品として、出資額に応じた利益の配分を受けることにした。しかし、当時の邦画界は二本立て興行であり、クレージーものは〝若大将シリーズ〟か、〝駅前シリーズ〟との併映が常であった。どちらも強力なヒット・シリーズである。

とうぜん、収益の配分は微妙なものになる。魅力的な作品の併映には、相乗効果という数字で簡単に割り切れない部分が大きく作用するからだ。田波は、「一度クレージーだけで勝負してみたい。その思いを実現させたのが、（一本立て興行を前提にした）『黄金作戦』だった」と指摘する。資金は全額渡辺プロ、東宝は撮影所とスタッフその他人員の現物出資という形をとった。ラスベガスのほかにロサンゼルス、ハワイにもロケして、晋のプロデューサーとしての手腕を存分に見せつけた。植木も「映画プロデューサーとしての晋さんは強気そのものだった」と回想している。田波が『ラスト・タイクーン』と呼ぶ所以であろう。

こと映画に関しては、渡辺プロのタレントのスケジュール権は晋が優先した。スケジュール表を持ってこさせ、真黒に埋まっている日程にお構いなく、「ここからここまでは映画」と押さえてしまう。監督や脚本家ともよく論争した。新人監督の起用をめぐって藤本真澄とやり合ったこともあるし、ラストシーンをめぐって監督と意見が対立したとき、「タイトルからおれの名前を消してくれ」とまで言った。七一年に設立した株式会社ジャック・プロは、もっとも気の合った脚本家田波靖男と語らってつくった会社だ。

晋の絶筆となったのは、キネマ旬報社刊『映像の仕掛け人たち』に寄せた一文である。自分の好きな映画への思い入れを存分に語ったものが、そのまま最後の文章になったのは、天の配剤といえるかもしれない。

「シャタラー」完成披露記者会見

わが生涯の最良の映画

子供の頃から映画が好きで、洗足の自宅から目蒲線にのって、目黒駅前の洋画専門館へ、毎週のように、一人で通った思い出がある。昭和一二～三年のことだから、当時としては、ちょっぴりませた小学生だったのかもしれない。

悪夢のような戦争が終わると同時に、アメリカ映画が解禁になり、底抜けに明るく豪華な娯楽作品が次々と上映され、空きっ腹をかかえた我われ学生をノックアウト。逆立ちしても、こんな凄い映画を日本人が、自分たちの手で作れるような時代は、絶対に来ないだろう、などと早稲田の下宿で、興奮しながら、朝まで語りあかしたものだった。

それから十数年。昭和三〇年代の半ばは、大衆文化が急成長し、テレビ文化の発達と共に映画界も黄金時代の真っ最中。ジャズプレーヤーからプロダクションの経営に多忙だった私も、いつの間にか映画の仕事にかかわるようになっていた。

しかし、本格的に映画づくりととり組むようになったのは、やはり、東宝でクレージー・キャッツのシリーズをプロデュースしてからである。記録によれば、このシリーズは、

昭和三七年から、四六年まで、ちょうど一〇年間に三〇本。われながらよくやったものだと思う。

考えてみると、当時、次第に各企業が近代化を進めている中で、音楽の世界もそうだったが、映画界は、もっと封建的で閉鎖性の強い特殊な社会だった。私のような門外漢が、この社会にとびこんで来たことで、気難しい巨匠、ベテランたちは驚いたらしい。白い眼で見られたこともあるが、たちまちそれにとけこんでいった。

やがてそういうベテランたちが進んで、私に協力してくれるようになり、映画づくりについてもいろいろ教えてくれた。それもまた、たのしくなつかしい思い出である。

当時は何と言っても、人情ものとかシリアスなものが、映画の主流を占めていたが、私は、早くから、歌と音楽と映像のリズムがうまく噛み合ったマルチ的な映画づくりをと考えていた。

昔から、泣かせることはやさしいが、笑わせることは難しいと言われている。やはり、笑いというものは、大衆の民度というか、風土とか観る人の感じ方によってそれぞれ違う。そこが一筋なわでいかないところでもある。

私たちが体験した焼けあとのジャズ・ブームはアメリカのあらゆるファッションを持ち込んできた。そうした実感が、私のエンターテインメントについての原点であり、それが大衆のリズムにフィットして大当たりしたんだと思う。何はともあれ、当たるということは、やっぱりプロデューサーにとっては無上の喜びである。

本格的な海外ロケもどんどんやった。スタッフの夢、観客の夢を叶えるために、私は、予算表をもって、会社側とねばっこい交渉を続けたことも、いまは、なつかしい。

昭和四二年の『クレージー黄金作戦』は東宝創立三五周年記念映画として、ゴールデン・ウィークを飾ることになった。文字通り映画の本場アメリカへ乗り込んでの大撮影になった。なにしろ、ハリウッドの映画人たちが、この無謀に近い映画づくりに驚いたというのだから、如何に大変な撮影だったか、判って貰えるだろう。

みんな若かったし、映画そのものに活力があったから出来たんだと私は思う。若いということは、それだけ感性が豊かということだ。苦しいこともあったが、たのしい映画づくりだった。

そこで、わが生涯の最良の映画はと問われれば、私は、ためらいなく自分の手がけた作品全部が、私にとって最良の映画であると、答えたい。

それにしても、いま映画づくりは、大きく変わった。撮影所の門は多くの若者たちに解放され、自由にのびのびと映画が作れるようになりつつあると言う。もちろん、配給・興行などの面ではまだまだ難しい問題があるが、そういうことを乗りこえて、どんどんいい映画を作ってほしい。

最近、音楽と映像がドッキングした新しい表現芸術が芽生えはじめている。そうした中から、本当に音楽のわかる優秀なディレクターが誕生することを、私はひそかに期待している。

映画は永遠に青春である。

最後の一行を、晋が無感動で書いたとは、とても考えられない。走馬燈のように多くの記憶がめぐっていたであろう。

晋逝去のとき、『シャタラー』はちょうどローマ・ロケを行っていた。とかくルーズになりがちなローマでは撮影進行中にもトラブルが多発し、晋は遠く離れた東京の病床でそれに対処していた。晋は意識をなくす日までローマからの報告を受け、指示を出しつづけていた。『黄金時代』のラスベガス・ロケのスナップがそうであるように、映画製作現場

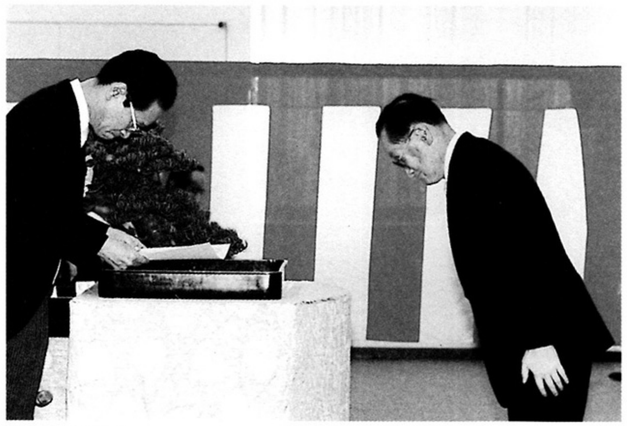
での晋の写真は、普段とちょっと違う表情をみせているものが多い。ミキはそれを「夢を一歩すすめた喜びと、いつも次回作が勝負だと言いたげな満足し切ってない両面の表情を感じさせる」という。海外ロケを多く手掛けたのも、世界と日本を結ぶ線と、夢とビジネスを結ぶ線を交差させたかったからだろう。ローマで晋の訃報に接した主演の吉川晃司は、「これが遺作になっただなんて」と絶句した。

晋の亡くなった翌月に第一〇回日本アカデミー賞は、『新・喜びも悲しみも幾歳月』の植木等に対して最優秀助演男優賞を与えた。映画スター植木が、映画プロデューサー晋の最初に手塩にかけたタレントだったことを思い合わせるなら、不思議というしかない最後の符合であった。

藍綬褒章の内意をめぐって

一九八六（昭和六一）年一一月三日、晋は藍綬褒章を内閣から授けられた。通産省産業政策局の推薦で、「ショー・ビジネスの発展に尽くした功績」を評価されたのである。受章について打診があったのは六月頃で、最初は「なんで」という戸惑いがあったという。いろんな方面の知人に相談した。青島幸男の意見も求めている。既成の価値観を覆えしつづけてきた青島の存在を忘れていなかったところに、晋の真骨頂ともいうべき周到な性格が現れている。

「青ちゃん、オレになぁ国が勲章をくれるっていうんだよ。どう思う？」。いきなり、晋から電話で相談をうけた青島は、一瞬、晋の細かな気配りに驚いた。「私は勲章なんて、いっさいもらわないタイプだし、やると言われてもいらないと答えるでしょう。それが私の勲章だと思っている。そんな私を知り抜いて、晋さんは私に相談してきた」。



藍綬褒章伝達式

なんという人だろう、晋さんという人は。そう感じたとき、青島の口からごく自然な意見が流れ出た、という。

「それはいい話じゃないですか。素直にもらったらいいと思うな。ひとつ盛大なパーティでもやりましょうよ」。「よせよ、パーティなんて恥ずかしい」。電話口の向こうに晋の照れた顔がみえるようだった。「超一流の照れ屋で、それまで派手なパーティは主催しても、自分がその真ん中に立つのは嫌がってたしね。でも、こんどは違う」というのが、青島の考えであった。青島は言った。

「社長の人徳とか実績が理由になってるんでしょう。でも、それは社長と一緒に仕事をし、陰で社長を支えてきた業界や会社の裏方さんたちに対する勲章でもあるわけだから、そんな人たちの代表としてもらえばいいんですよ」。

「ああ、そういう考え方もあるのか。裏方の代表としてね。オレだけがもらうわけじゃない。そういうことか」。晋の口調がだんだん呟きに近くなった。事実、受章後のマスコミ関係のインタビューではこの趣旨をもの柔かな口調で語っている。「やはり躊躇してたんですね。私があのとき、そんなもん、やめてしまえと言ったら、晋さんはやめていたかもしれない。私はいい話だ、もらっていいんですよと繰り返し言った」と青島。

「じゃ、いいんだね」「いいんですよ。それからパーティは盛大に。私も駆けつけますから」。これが電話とはいえ、青島と晋が二人だけで話し合った最後の会話になった。

青島は、「あのとき、晋さんから相談をうけた人たちは、みんな異口同音にもらいなさい、と答えたと思う。それは、やはり晋さんの人徳でしょう」と言う。

その〝人徳〟を、ある程度まで具体的な言葉に置き換えると、「フトコロの広い人」になるのではないか。若い頃の青島は、「そう、昭和三四年から三七年頃までかな。私も若僧だったから、突っ張っていて、晋さんを渡邊さん、美佐さんを奥さん、と呼んでいた。

褒章の記
渡邊晋
内閣総理大臣
総理府賞勲局長

藍綬褒章

普通なら社長、美佐さんと言うところだけれど、私は渡辺プロの社員じゃないから、社長と呼ぶ筋はない。美佐さんというのも慣れ慣れしい、と思ってたんです」。

「ところが、晋さん、美佐さんは私をはじめから青ちゃんと呼んで、フランクな態度で一貫している。とうとう私が渡邊さん、奥さんと呼ぶのに照れちゃって、人並みに社長、美佐さんになりました」。

それよりだいぶ後のことになる。「息子の就職の件を晋さんにお願いしたことがあった。宣伝関係の仕事をやりたいなんて言うもんだから、それなら晋さんにいい知恵があるかもしれない、と思った。六本木のサーティスリーで会って、かくかくしかじかと話したら、ああ、わかったとひと言。あとは酒になった。ところが酒がまわってくると、こうして頭をさげている自分が口惜しくなってね、つい、いまの話はなかったことにしてくれと言っちゃった」。

藪から棒のような話の展開に、晋は驚いたらしい。ちょっとした口論になりかけたとき、ハナ肇がたまたま飲みにきて、「なんだ、なんだ」と割り込んだ。青島の自己嫌悪の弁を聞いたところで、ハナは「どうも酒癖が悪くなったもんだ」と溜め息をついたが、晋はぼそっと「そんな青ちゃんがオレは好きだよ」と漏らした。「最後は〝ごめんね、社長〟と言うしかなかった。ずいぶん論戦を交えたこともあるけど、最後はどうしても〝ごめんね、社長〟になってしまう。広いフトコロのなかは同時に居心地もよかったんだね」と、青島は追想をまとめた。

要するに青島は、晋のショー・ビジネスに対する貢献とともに、晋の人徳もまた受章の環境づくりに大きな役割を果たした、と見ているのである。

一一月三日に、授章の正式な通達があった。

一一月一七日には渡辺プロ・グループの祝賀パーティが、クラブハウス・サーティスリーで行われた。社員たちは誰もが晋以上に嬉しそうな表情だった。

一二月三日には、「渡邊晋さんの藍綬褒章受章を祝う会」がキャピトル東急ホテル・真珠の間で開催された。五島昇が発起人代表となり、政・財・官・芸能各界の著名人一〇〇名の連名で案内状が発送された。世話人は盛田昭夫、塚本幸一、千宗室、岡田茂、堤清二、飯田亮、徳間康快、牛尾治朗が買って出た。

宴のピークは、司会の高橋圭三が与田輝雄とそのコンボの居並ぶステージに、晋を呼び上げたときにやってきた。晋がウッドベースを手にしたとき、会場は割れるような拍手に包まれた。シックス・ジョーズのリーダーが戻ってきた。晋はプレイした。

青島との会話にもかかわらず、晋は最後までプライベートなお祝いという点にこだわっていたようだ。家族にもしばしば「きてくださる皆さんに申し訳ないなぁ」と漏らしている。「わざわざいらしていただくのなら、それなりのおもてなしを考えなければ」と、社員からもいろいろアイデアを募った。

準備のためのタイム・リミットがきた段階で、晋は言った。「それじゃあ。私が一〇年ぶりにベースを弾いて、シックス・ジョーズの再現会をやろう」。いかにも〝プレイング・マネージャー晋〟らしい仕切りであった。だが、プランナー晋のこのアイデアを、プレイヤー晋がどこまで表現できるかが大変だった。身体の不調を押して、晋はほとんど毎晩のようにベースへ向かった。

本番の数日前から、晋は松宮庄一郎に頼んでレッスンをつづけた。松宮が「社長のはもともと邪魔にならないベースだけれど、こんどは主役なんだから邪魔になるくらいでなきゃ」と言うと、ふふと笑って松宮の頬をつねった。

あくまでシャイな晋は、自分からは娘たちにも受章のことは伝えていなかった。家に届いた祝電で褒章受章を知った万由美は、「パーティーの前夜、父はほんとうにリラックス

伝達式の夫妻

壇上でベースを弾く晋

藍綬褒章受章を祝う会

していて、私たち女三人が明日はなにを着ようかと着せ替え人形のように騒いでいると、いつもならたしなめるか目を細めて黙って見ているだけだった父が、うれしそうに選んでくれたんです」と語っている。自分がはじめて主役になるパーティーでも、テレくさそうな〝少年〟のような顔をしていたのがとても印象的だった、という。

パーティには、早大軽音楽部の先輩や仲間も駆けつけ、とうとう『都の西北』の大合唱になった。三〇年前の昨日につづいたような今日であった。その圧縮された時間を掌に実感しながら、晋は感謝の頭をさげた。

それから二〇日あまりで、晋は大久保の国立病院医療センターに入院する。「間にあってよかった」。五島や世話人をつとめた友人たちは、ほろ苦い顔を見合わせた。

晋社長、逝く

再び、記述を晋の病状に戻さねばならない。

左上顎部の小さな腫瘍から、左頬へと広がった病勢を、晋は無類の気力でねじ伏せた。この部位の癌はほぼ完治した。

一九八四（昭和五九）年、軽井沢のゴルフ大会の頃から、我慢強い晋が体の不調をもらすようになった。その不調が高じて大久保の国立病院医療センターに入院、改めて精密検査を受けた。このとき、回腸に癌が発見され、きわめて危険な状態にあることが判明した。診察にあたった同病院の医師団に、偶然、かねて親交のあった森下泰の令嬢・京子（現在イタリア在住）もいた。美佐は医師団の意見に従い、晋は小腸の摘出手術を行ったが、本人には癌の告知をせず、ひそかに万全の治療を施した。

術後も、晋は依然として粘り強い闘病生活を送っていた。ある日、病室にひとりでいるとき、渡辺企画の社員が見舞いにきた。「おお、君は早稲田の後輩だったな。ちょっと、ついてきてくれないか」と言って着替えると、晋は医療センターの裏門から夏目坂をくだって、穴八幡をかすめて母校に行った。晋が低くハミングした。「なんです？　その歌は」と質問すると、「早稲田の応援歌だよ。七八年春の六大学リーグに間に合うように、おれが作曲したんだ。青ちゃんに作詞してもらって、『早稲田健児』というタイトルなんだよ。村井資長総長から感謝状をいただいた」と、晋は答えた。そのあと、唯一残っている都電荒川線に乗った、という。その夏、晋は元気に退院した。

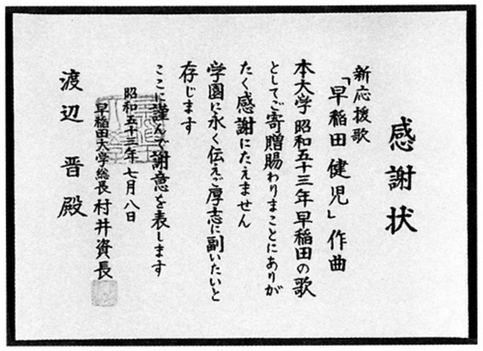
八七年一二月二〇日すぎ、晋が「どうも具合が悪い」と訴え、ただちに医療センターに入院した。藍綬褒章受章パーティの直後である。医師たちは、美佐に癌の再発と、それが肝臓に転移していることを告げる。夫の晴れの受章も、美佐には束の間の歓びに過ぎなかった。

一二月二五日、美佐はミキと万由美に、はじめて父親の本当の病状を知らせた。ミキと万由美は、あまりの衝撃に「パニックに陥る余裕もなかった」という。

限られている時間を思えば、父の看護に専念したかったが、それは許されなかった。晋に気取られてしまうからである。それまでと同じように、二人は渡辺エンタープライズに出勤しなければならない。ミキはそれ以外にも、プロの役員会議、予算会議に出席するように求められた。急にいろんなレベルの仕事に巻き込まれ、自分の人生が仕事の海を漂流しているような感覚を味わった。「万由美と私が、社会と向かい合い、会社の仕事に腰を据えてかかるようになったのは、あの一二月二五日からです」と、ミキは明かしている。

ここでは、以後の晋の短い足取りを追うことにする。

一二月三〇日、晋は病院から目黒・八芳園の音事協制作の年末番組収録に顔を出し、理


感謝状

新応援歌
「早稲田 健児」作曲
本大学 昭和五十三年早稲田の歌
としてご寄贈賜わりまことにありが
たく感謝にたえません
学園に永く伝え厚志に副いたいと
存じます
ここに謹んで謝意を表します
昭和五十三年 七月 八日
早稲田大学総長 村井資長
渡辺 晋 殿

早稲田健児感謝状

表彰される晋

事長として挨拶した。降雪のなか、「どうしても行く」と言い張る晋に根負けして、ミキが同行した。玄関まで出迎えていた相沢秀禎（サン・ミュージック社長）らに、ミキを指して「これは私服の看護婦さん」とジョークを飛ばした。

大晦日から三日まで、無理を言って帰宅させてもらった。家族としては、最後の正月を晋のもっとも心安らぐ広尾の自宅で、ともに過ごしたかったからである。といっても、元日に医師がきて点滴をしている状態だから、来客には詫びつつ帰ってもらうしかない。しょんぼりと帰ってゆく桜井センリや宮川泰の後姿に、家族は心中深く「ごめんなさい」と詫びながら手を合わせた。恒例となっていた渡邊家の賑わいはなく、一月四日に改めて入院する。

一月七日、恒例の渡辺プロ新年会にも病院から出席した。周囲は衰弱の激しい晋を気遣ったが、晋は病院のなかをゆっくりと歩きまわって、七日に備えていた。当日は、私服に着替えた本職の看護婦を伴って、車椅子で東京プリンスホテルに向かった。晋の挨拶の間は美佐が介添えし、鏡開きにはミキと万由美も加わった。一メートルでも一〇センチでも、とにかく身近にいることが必要だったのである。乾杯のとき、晋の身体が揺れていた。並んで立っていた植木等は、そっと晋の背後にまわった。

青島幸男は車椅子の晋をみて、「よほど深刻なのかい？」とハナ肇にささやいた。パーティが順調に滑り出すと、晋は、ほっとした表情で病院に戻った。「あとは治療に専念するよ」と言ったのだが……。

美佐やミキ、万由美がいまも心残りに思っているのは、夫の、父の看病に専念できなかったことだ。これからの会社をどうするかという、手にあまるような大きな課題がのしかかっていた。そのなかで、晋の実兄・剛と一枝夫妻が病室に泊り込んで看護に尽くしてくれた。この献身的な姿に感謝しつつ、美佐たちは病室のドアをそっと押し開く。一枝夫人の行き届いた看護がなかったら、私たちはもっと大変で、もっと淋しく、もっとつらい思いをしただろう、と家族は語っている。

八七年一月三一日午前八時二〇分、晋はその生涯を閉じた。享年五九歳。危篤に陥った晋の枕頭では、美佐、ミキ、万由美のほか、田辺靖雄とクレージー・キャッツの安田伸が徹夜で見守っていた。前夜、ハナ肇と谷啓が仕事の帰りに見舞ったとき、晋は「二人にお茶を出して」と言った。最後まで皆への気配りを忘れない晋だった。二人が帰ったあと、危篤状態になった。

急をきいて、盛田昭夫・良子夫妻や、鈴木三郎助など親友たちが深夜にもかかわらず訪れてくれた。その別れの時間を持てたことが、晋の最後の幸せであった。家族たちには、ながい、ながい夜がつづく。

暗い闇の白じら明けとともに、晋の呼吸が早くなり、弱っていった。そして午前八時二〇分がきた。医師のさまざまな処置が行われる慌ただしいなかで、ミキがゆっくりしたテンポで『スター・ダスト』を歌いはじめた。美佐と万由美は、静かに思いのたけをこめて「ありがとう」のことばを繰り返した。この世に生を享け、数々の大きな業績を残したひとりの人間が、いま、このときにまた冥界に還ってゆく。その人生を讃える調べと深い感謝の波動が、旅立つ晋を送り出した。

秋山稔医師の死亡診断書。

イ．直接死因・急性心不全。

ロ．（イ）の原因・癌性胸腹膜炎。

ハ．（ロ）の原因・回腸癌。手術の所見・回腸癌。

死後の栄光

数々の催事に鍛え抜かれた社員たちは、整然と晋の葬送を運んでいった。一月三一日は無言の帰宅をした広尾の私邸で仮通夜が営まれた。主な弔問客は中曾根康弘首相、後藤田正晴官房長官、五島昇日本商工会議所会頭、盛田昭夫ソニー会長、堤清二西武百貨店会長、鹿内春雄フジサンケイグループ会議議長、青島幸男参議院議員をはじめ、作家、タレント、業界関係者が沈痛な面持ちで頭を垂れた。

本通夜は二月一日午後六時から、大田区池上の池上本門寺で執行された。焼香客一五〇〇名。翌二日午後一時から、同じく本門寺で密葬が執り行われる。参会者二〇〇〇人。厳寒の曇り空に小雪の舞う佇まいが、改めて悲しみを誘った。

二月一六日、中曾根内閣総理大臣から一月三一日付をもって、故人の音楽事業振興への貢献に対し、勲四等瑞宝章が授与された旨の示達があった。

本葬は二月二〇日午後一時から、港区の青山葬儀場で執行された。渡辺グループと音事協の合同により、中曾根首相ほか各界から三五〇〇名が参列した。喪主は渡邊美佐社長代行、葬儀委員長に五島昇日商会頭、友人代表に盛田昭夫ソニー会長。

ここで、葬儀委員長、友人代表、音事協理事長代行、そしてタレント代表・植木等の弔辞を記録しておく。晋がなにを成しとげ、なにを残したか。そして、なにを継承しなければならないかが、悲しみの行間から鮮明に浮かびあがってくるからである。植木は原稿なしで遺影に語りかけたが、ほかのお三方については弔辞の原文をそのまま再録する。

弔　辞

葬儀委員長　五島　昇

渡邊　晋さん。一月三一日の朝、私は貴方の突然の悲報を知らされました。昨年の一二月の貴方の藍綬褒章授章を祝う会ではともに喜びあい、今年の恒例のナベプロの新年会でも、風邪をひいていたとはいえ元気な姿を見せて呉れました。

それから間もない訃報に、これまでの君との友情の日々が心に甦り、呆然と言葉もありません。

思えば、発病以来二〇年間、生来おしゃれな君が病を真正面からうけとめ、闘う姿に私は「晋ちゃんえらいな、頑張れよ」と心に叫んでおりました。そして不断の闘いは、どれほど多くの人々に感動と勇気を与えてくれたことでしょう。

しかし今、君は帰らぬ人となってしまいました。あの褒章を祝う会は皆へのお別れの会であったように思われてなりません。

戦後の日本に、新しい芸能プロダクション業を確立し、それを近代的なビジネスにまで高め、人々に青春と喜びを与えた功績をたたえ贈られた褒章を、自分だけのものではなく、業界が世間に認められたことだと、関係者と渡辺プロ全員の栄誉として素直に喜んでいた君の姿は昨日のこととなってしまいました。

晋ちゃん、君は五九歳の若さで世を去りました。しかし、その一生は信念に貫かれ陰徳を残した素晴らしい人生だったじゃないですか。戦い抜いて斃れた戦士にも似た君の男のロマンを感じます。もはや手をにぎり、肩をいだきあって共に喜び、共に泣くことは出来ません。

けれども貴方を知り、貴方の温顔と、あたたかな思いやりのある心に触れた者達は、決して貴方を忘れることはないでしょう。

今日も君が育てた渡辺プログループの人達が悲しみをこらえ君を送ってくれています。そして巣立っていった多くの教え子達も君を慕って最後のお別れにきてくれています。人間としてもって瞑すべきことです。

叙勲状

本葬（青山葬儀場）

五島昇葬儀委員長

いつも夢をもち現実と戦い、私たちに憧れと喜びを与えてくれた「心のプロデューサー、晋さん」、君の好きだったスター・ダストの歌のように、星の一つになって私達を見守って下さい。

晋ちゃん、渡邊晋さん、　さようなら。

友人代表　盛田　昭夫

お別れの言葉

晋さん　いまあなたのご霊前にお別れを述べなければならないことは本当に悲しく残念でなりません。あなたは還暦を目前にしながら、あまりにもあわただしくあの世に旅立って行かれました。

後に残された多くの友人の一人としてその代表として私はお別れを申し上げます。

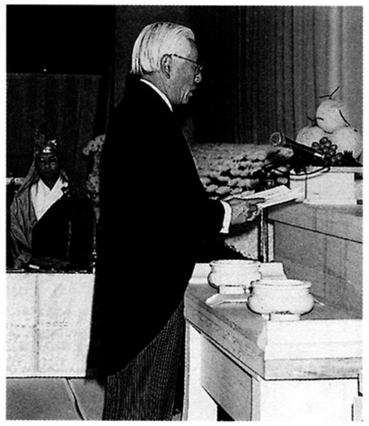
本日ここに参列されている方々だけでなく、あなたは大変多くのそれも極めて幅広い友人を持っておられました。その一人一人がそれぞれに、あなたとの数知れぬ思い出にひたっております。そして、あなたを失ったことで、打ちひしがれております。

あなたは生を享けて五九年余、あまりにも短い歳月でしたが過去三〇数年、美佐夫人と共に渡辺プロダクションを築き上げられ音楽を通じて私達の社会に偉大な貢献をしてこられました。

その大きな御功績について私は今更ここで申し述べることはいたしません。

しかしこの間、あなたは本業の音楽分野以外に、実に広く多くの人達と交友をもたれました。そしてあなたの温かく厚い友情によってあなたに知己を得た誰しもが、あなたを本当に忘れ得ない友とする様になったものでありました。

あなたが後に残された美佐夫人、ミキさん、万由美さんのお気持ちは察するに余りあるものがございます。ことし一月七日、病をおしてナベプロの新年会を開かれた時に、我々



盛田昭夫氏

一同の前で「二一世紀に向かっての大きな夢をもって全員頑張ります」と宣言されたあなたに、私共は大きな感銘を受けたのでした。

此の様なことになるとは誰も考えもしなかったのです。あなたもさぞ心残りでありましょう。

しかしあなたの密葬の日、あなたの柩をお送りする時に、美佐夫人が深い悲しみをこらえながら「私達三人、社員一同、ひとつになってナベプロを守ります」と、はっきり言われました。その時、ミキさん、万由美さんが両側から美佐夫人をしっかり支えている姿を見て、私共は本当に心を打たれました。

美佐さん、ミキさん、万由美さんはけなげです。立派です。あの時あなたは天国からいつものように微笑みながら、三人を頼もしく眺めておられたに違いないと、私共は今も信じております。

あなたと共に幾多の苦しみを乗り越えてナベプロを育て上げられた美佐夫人、また「生まれ変わって来た時もお父さんの娘にしてね」とあなたを慕うミキさん、万由美さん。あなたは素晴らしいご家族をもっておられます。そして、素晴らしい社員を持っておられます。

密葬の時に、何か問題があると思わず「それは社長に聞いてこよう」と言ってしまってから、突然現実に気づき泣き出してしまったナベプロ社員をみて、私達はあなたと社員のきずなの大きさを改めて知らされたのでした。

あなたがどんなに偉大であったか、どんなに多くの人達から慕われ愛されていたか。

私達はどんなに大事な人を失ったのか、あなたに旅立たれた今、思い知らされた気がいたします。

本当にあなたにはお世話になりました。ここに友人を代表して心から有難うございまし

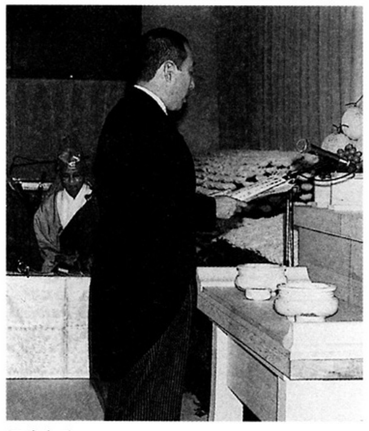
たと御礼を申し上げます。
私達友人は、およばずながら、あなたの残されたご家族や会社に出来る限りの力になりたいと心に決めております。しかし、何といっても、やはり淋しい、悲しいとしか申し上げようがありません。
私達友人は、それぞれに万感の思いを込めて、あなたに、さようなら、安らかにお休み下さい、と申し上げるときが参りました。
晋さん、本当に有難う。どうか、どうか、安らかにお眠り下さい。
さようなら、晋さん。

合掌

弔　辞

社団法人　日本音楽事業者協会
理事長代行　堀　威夫

謹んで、故渡辺晋理事長に、お別れの言葉を申し上げます。
音楽産業を取り巻く環境が、大きな変革期を迎え、プロダクション経営は、かって経験した事の無い困難な状況に在る今日、その改善に日夜努力を重ねられていたあなたの、突然の訃報に接し会員一同、暗然たる思いに、ただ涙をのむばかりであります。
あなたは、私達にとって実にかけがえのない指導者でありました。同じプレーヤーとして過ごした時代。またプロダクション経営に専念された時代。いつも先達として、私達の一歩先を歩まれ、その後姿を大きな目標としながら私達は励まされ、また導かれて今日まで参りました。あなたが創立された、渡辺プロダクションの見事な経営と、その成果は、私達後輩にとって、常に憧れと尊敬の的である、と同時に、ともすると色眼鏡で見られ勝ちなプロダクション事業を、一般企業のレベルにまで引き上げて下さった功績は、業界はもとより、万人の認めるところであります。

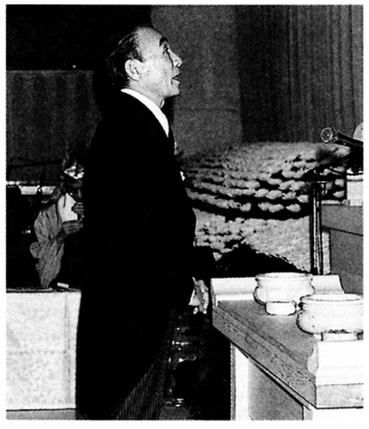

堀威夫氏

また、その事は、私達事業者にとってどれほどの勇気と活力を与えて下さった事でしょうか、計り知れないものがあります。
日本音楽事業者協会の設立にあたり、加盟各社の経営近代化と、モラル向上に尽力され、特に二代目理事長に就任されるや、協会の法人化促進に心血を注がれ、見事これを達成されました。此の事は私達会員にとって、永遠に忘れる事の出来ない思い出であります。今ここに、あなたと言うリーダーを失って、改めて、その偉大さを知り、またその損失の大きさに、ただただ茫然自失の念を禁じ得ません。
志半ばにして逝かれたあなたにとっても、さぞ心残りの事でしょう。
しかし、無情にも時の流れは、此の嘆き悲しみのためにさえ、いっこくの猶予も与えてはくれません。
今、私達日本音楽事業者協会会員一同、力を合わせ悲しみを乗り越えあなたの遺志に従い、やり残された協会事業を受け継ぎ、明るく秩序ある業界作りと、プロダクション事業のより一層の健全化に向かって雄々しく挑戦し、全うする事をここに誓います。
どうぞ安らかにお眠り下さい。
長い間お疲れさまでした。

弔　辞

植木　等

社長、長い事、お疲れ様。とてもあなたが遷化されたとは思えない素晴らしい顔で、今、僕を見ているじゃないですか。
藍綬褒章受章なさった日に秋山庄太郎さんが撮って下さったそうですね。とても良く写ってる。
今、お別れを言わなきゃならないとは、とても想像がつきませんでした。藍綬褒章を祝


語りかける植木等さん

うパーティーで、あなたが久しぶりに見せてくれたベース、素晴らしかったです。それから幾日たったんですか。暮れに僕に電話をくれましたね。「植木、ちょっと風邪をこじらしたんでな、入院するけど点滴やってすぐ元気になったよ」。言ってほしかったです。しかしあなたは疲れていた。「疲れてるよ」と、どうしてはっきり言ってくれなかったんです。

今、振り返ってみますと、あなたが敷いてくれたレールの上を我々は気持ちよく走らせていただきました。花道も作っていただいて、いろんな事が今、思い起こされます。タレントの一人一人あなたとの出会い、あなたとの心の触れ合い、いろいろ、今、思いが胸にあると思います。

あの仕事に対する素晴らしい緊張感、すべてあなたが教えてくれたものです。なんとなく七日に会う時、僕は期待してました。「植木、元気になったからまた暖かくなったら一緒にゴルフをやろう」、言ってくれると思っていた。

なんで急いでそっちへ行っちゃったんですか。なんかそっちはバンカーが多いような気がする。そんなとこへどうして行っちゃったんです。

社長、僕が「毎日映画コンクール」の助演男優賞を貰ったといったら喜んでくれたそうですね。あの後二つもやりましたよ。「キネマ旬報賞」の助演男優賞、そして昨夜、「日本アカデミー賞」の助演男優賞。貰いました。すべてあなたのおっしゃったとおりやった結果です。本当にありがとうございました。どうぞ、ゆっくりやすんで下さい。

社長、さようなら。

午後二時から、ハナ肇の司会で音楽葬となる。日野皓正のトランペットが蕭条と冬空に流れ、コーラスとバンドが渡辺プロの歴史ともいうべきヒット曲をメドレーで演奏した。

また早稲田大学の吹奏音楽隊は、なにかと面倒見のよかった先輩の霊に校歌を捧げた。

戒名は寂光院恭敬法篤日晋居士。白木の位牌は美佐、遺骨はミキ、遺影は万由美に抱かれ、盛田友人代表の先導で自宅に帰った。

死後の栄光は、なお晋を追い、飾った。四月二日、「年間最優秀プロデューサーを選ぶ会」は、特別賞を授与し、五月二二日には藤本真澄賞が、一〇月一四日には第七回日本作曲大賞音楽文化賞が、一一月一六日には日本レコード大賞音楽文化賞が、それぞれ授与された。

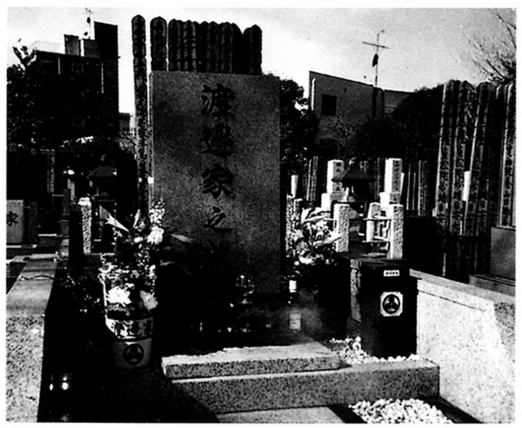
遺骨は渡邊家の菩提寺である福岡市中央区唐人町二丁目四番地五九号の妙安寺にいったん納められたが、遺族は近辺に参詣できる場所を希望して、八七年一一月に千駄ヶ谷の法雲山仙寿院に造墓、一二月四日納骨式（分骨）を執り行った。

事業継続の決意

盛田昭夫は弔辞のなかで、美佐、ミキ、万由美がこれからも渡辺プロの活動を継続してゆくと決意した、その健気な姿を晋の霊前に報告している。

それまでの渡辺プロの実績、それから渡辺プロの行動を見る限り、美佐たちの決意表明は、あるいは当然のことと受けとられたかもしれないが、渡邊家の内部では、これは必ずしもストレートに出てきた結論ではなかった。

美佐、ミキ、万由美の母娘三人が、晋の病状をきびしくとらえ、将来のことを考えはじめたのは、前述したように、晋の逝去からほぼ一カ月前のことである。晋しか知らないことが、あまりにも多過ぎた。晋に質問するのが、いちばんの早道だったが、そのために病状の末期段階をさとられてはならない。



仙寿院の墓

藤本賞授賞式の左からミキ、美佐、万由美

渡邊家としては、確信の持てる継承路線を見い出せないまま、晋の最期のときを迎えたことになる。そこに晋自身の再起に賭ける強烈な意思を窺うことができる。「負けてたまるか」。美佐たちは奇蹟を祈る気持ちだったろう。

その願いも空しく、晋が最期の息を引き取った直後、美佐たちが真っ先に案じたのは、老母サキに悲報を知らせることであった。広尾の自宅でひたすら愛児の無事な帰還を待っているサキは、加齢とともに体調を崩していた。長男の剛と河合がつらい使者となった。五反田・関東逓信病院のサキの主治医に事情を話し、自宅に出向いてもらった。

主治医立ち合いという慎重な手段を取ったのだが、サキの態度は冷静だった。すでに最悪の事態を想像もし、それに対処する覚悟もしていたようであった。渡邊邸に寄宿していたタレントたちから、〝ばぁば〟と呼ばれ、慕われていたサキは、逆縁の悲しみを博多の女性らしい端然とした気丈さで押し通した。

それを見届けた安心からか、こんどは美佐が急に気弱になった。「パパと一緒にやってきた仕事だから、パパとともに引退する」と言い出したのである。驚く娘たちに、「私はパパの掌の上を飛びまわっていたようなもの。私ひとりになったら、とてもやれないわ」と語っている。

ミキと万由美は強く反対した。「お父さんと一緒に会社をつくった責任があるでしょう」、「その会社だって、お母さんの引退を許さないでしょう」。そして、二人は口を揃えて、「これまでの渡辺プロが残した業績を、このまま宙に消えさせないように軌道に乗せるのは、残された者の義務だと思うわ」と言った。

美佐の妻としての悲しみに、副社長としての責任感が取って替わった。「でも、これは楽な仕事ではないのよ」と、美佐は娘たちの顔に強い視線を当てた。晋の死から本葬までの二〇日間。渡邊家の内部でも、緊迫したドラマが繰りひろげられていたのだった。

母堂サキ

一九八八（昭和六三）年一月二六日、東京プリンスホテルでの「渡邊晋追悼の会」には一二〇〇名、八九（平成元）年一月二七日の「故渡邊晋三回忌」には九〇〇名。九三（平成五）年一月三〇日には仙寿院墓前で七回忌法要を営み、二月八日に東京プリンスホテルで「渡邊晋メモリアル・パーティ」を開催した。来賓一二〇〇名。盛田ソニー会長が来賓を代表して挨拶し、中曾根元首相が献杯と乾杯の音頭をとった。故人の遺徳をしのぶ人は絶えない。

そのなかで、青島はハナや植木としみじみ往年を回顧することが多かった。「藍綬褒章のパーティをやっておいてよかったな。お葬式や法要は、いくら盛大でも晋さんは見るわけにもゆかないもの」、「そうだよ。しかし、社会的に大きな存在で多忙な人たちが、いつまでも晋さん、晋さんと言って、こうして集まってくれる」、「私が駆け出しの作家の頃も、参議院の議員になっても、晋さんの対応はまったく変わらなかった。それは政界財界の人たちに対しても同じで、ああ、この態度は見習わなくてはいかん、とよく思ったよ」、「あの、〝いろいろあるよ〟をもう一回、聞きたいよなぁ」。

この間、美佐は悲しみを振り払おうとするかのように、八九年一二月に広尾私邸の取り壊しと、マンション新築を決意した。もともと旧宅は、晋がいることを前提にして、彼の好みも反映されていた。それだけに晋のいない空虚さが、残された者には痛切に感じられた。一二月一九日から二〇日にかけて、旧邸をライトアップして「お別れ会」を催す。「今は亡き主人と共にさまざまな思い出をつくってきた家であり、皆様にもおなじみをいただいた家ではありますが、新しい時代を迎え気分一新したく思います」と、美佐は案内状に書いた。一晩目は政・財界から芸能界まで、幅広い常連の人たちが、二晩目は渡辺プロ・グループの社員やOBたちが駆けつけた。感無量の瞳たちが、白亜の建物にそそがれていた。

「MY　FATHER」の合唱（メモリアル・パーティ）

しかし、悲しみの波はまだ美佐たちを洗ってゆく。九一（平成三）年一一月七日、晋の母堂サキが急性肺炎のため逝去した。享年八九歳。新邸の工事中、サキはミキとともにマンション暮らしをしていた。竣工なって広尾に戻る一ヵ月前、朝食を摂りながら亡くなった。大往生であった。渡辺プロの初期からその軌跡を見守り、社員やタレントから「ばぁば」と呼ばれ、晋・美佐とは違った意味で心の寄りどころとなっていた。渡辺プロに強い愛着を持ち、吉田栄作のスター化には手放しの喜びを示した。九日に仙寿院で、喪主渡邊剛（長男）による告別式が行われた。

翌九二（平成四）年一月八日には、美佐の厳父であり、マナセ・プロダクション取締役会長の曲直瀬正雄が肺炎でこの世を去った。享年八七歳。九日に日本キリスト教団渋谷教会で、喪主曲直瀬陽造（長男）によって社葬が営まれた。

美佐がその人柄故に頼みとしていた慈父のごとき五島昇も、八九年三月二〇日に肺炎が原因で逝去してしまっていた。身辺寂寥とはこのことであろう。

渡辺音楽文化フォーラムに編集事務局を置いて、作業を進めていた『渡邊晋・追想録』が、九三年の「渡邊晋メモリアル・パーティ」に合わせて刊行された。A五判変型判三八八ページ。政治家では中曾根康弘、河野洋平、青島幸男他二名、財界人では五島昇、石川六郎、盛田昭夫、鈴木三郎助、堤清二、堤義明他一二名、マスコミ界では清水達夫、諏訪博、中川順、日枝久他八名、作家では五木寛之他二名、そして音楽・芸能関係者は四八名、その他学友・社員を合わせ合計一〇八名の知己友人が、晋をしのぶ一文を寄せた文華集である。

これに先立つ八七年、ミキは亡父のメモリアルCDを制作していた。作詞・秋元康、作曲・林哲司の『MY　FATHER』は、ハナ、植木、谷をはじめ梓、アグネス、小柳、沢田、中尾、マルシア、ゆうゆにミキも加わって、総勢二四人の歌手が参加する清冽なレ

広尾旧邸お別れ会②

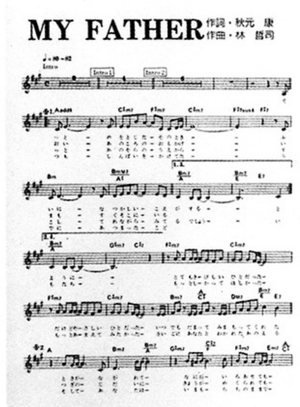
広尾旧邸お別れ会①

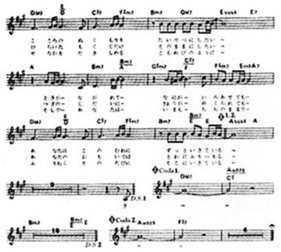
クイエムとなった。もう一曲、沢田研二の自作自演『THE　BASS　MAN』も収録されている。『MY　FATHER』は晋の一周忌、七回忌にタレント全員によって歌われた。

「渡邊晋メモリアル・パーティ」のあった九三年の五月二八日には高輪プリンスホテルで、曲直瀬正雄、花子、翠、そして坂本九の「思い出を語る会」が持たれた。永六輔らと発起人に名を連らねた井原高忠は、日本テレビを退いて在住しているハワイから、わざわざ駆けつけてきた。彼は曲直瀬美佐との交遊から、思い出を語りはじめた。曲直瀬から渡邊につづく四八年間の流れは、そのまま戦後芸能史の大山脈であった。

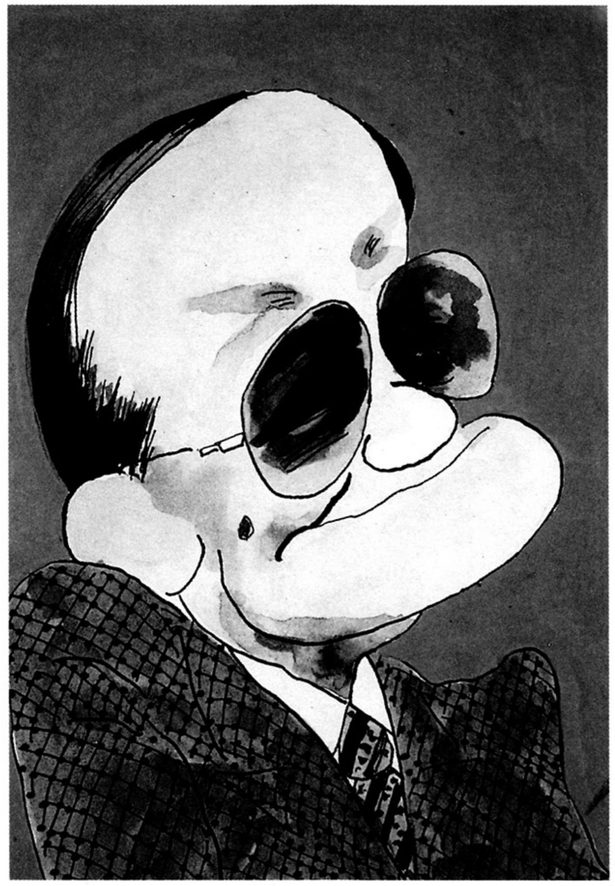
小林秀雄は『無常といふ事』のなかで言っている。「生きている人間などといふものは、どうも仕方のない代物だな。（中略）其処に行くと死んでしまった人間といふものは大したものだ。何故、あゝはっきりとしっかりとして来るんだろう。まさに人間の形をしてるよ。してみると、生きてゐる人間とは、人間になりつつある一種の動物かな」。

逝ってしまった晋は、日に日に人間としての形をはっきりさせ、ますます巨大な存在になっていた。そのなかで、美佐は、ミキは、万由美は、そして社員たちは、渡辺グループを保持しなければならず、保持するためには大胆な施策を探らねばならなかった。





「MY　FATHER」の楽譜



晋社長の似顔絵
(イラストレーション／俵屋猛)